

河内子史

913
1



朔蒼老仙追筆



坐二三子

張府 時庵茶烟編



湯淺四郎氏寄贈

71

A91
ト



序



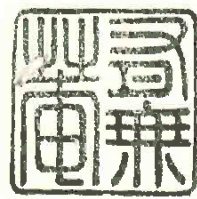
南義隆に曰適未くハ夫子の時之たま
くを夫子乃順也とを修志上濃陽舟木
山下の暮如朔念師ハ昔時東漂西泊
市安北行乃とまり名護屋より如左師
能何とん清せらる門徒を辱る事
ゆくすくの敷をきく己尔廿と觀の早業
と得て十とせし乃先ある位才四五輩と
撰之亭机右に招き能たきハ我もハ旬れ

く指を折る齡く成腰に張子無弦月
りも甚しく顔小片を波ハ蒼海くりも
多し身自ハ如く嬰兒の愚よと
まじりて誠し黄泉に趣く一きを待の
外ふりれハこころハ二祖蓮師よりの此府に
傳ふ数卷の書およひきく如帙おさす
茶烟に何し竹末正風ハ警茂を示
しておち故郷に帰る老を養ひんよ
一歩止むるに道るく其意に任せたりん

隋唐系國と隔るも丁の玉葉燕の香はま
路の宵ゆく慕はくくくくくくくくくく
満九十歳の命終るを孫生十八日の曉終に
安否の蓮甚よくけりたまし鳴呼るぬ
名跡し盡ぬ悲にまじりていさす侍に
お乃何しりそささささささささささ
思ひたことハハハハハハハハハハハハ
形まハハハハハハハハハハハハハハハハ
文場といとかまんと宝龜山に傍の

社中と集りて一巻と調へ梅木にちり
しめらるゝハ豈只一時の潤色のしめらるゝん
とて厚志と頻り感へや川もさしませ
し母の恩と顧まはし洋のふ徳に照り
せんとせしは子後と忘れて有痛汝智の
習無辱乙伍おこし海へも冊子のさしに
筆と揮て河へ海へをこりい舟作りぬ

ふぬ改元寅三月



此書の序は甚にばらばらなりて
ちんちんの様とさうりて

笑てさし本意形もささめこそせ
兼行

あ海を思ひよさるむ目 みの 茶畑

建急く未だ初雛笑り川亭 官之

くよも屢とあり香 啼し 東翠

水くみハ猶空くぬ月のそら 蛙の

露くたにいとふ疎乃為作ら 西河

ウ
親のそとよめれてそ身の秋を知り 襟二

罰之利生も阿の神の堂 馬海
 萱不夜半のむくむき海 悠語
 省れ余波に襟に短冊 里泉
 蛸も妹のききけの海に 乙伍
 月影凄く枯萩の音 其調
 潮汲の濁る海に 芦笛
 枕配北は形ときける 宇朝
 琵琶を奏する居るは所の杖ま 可咲

たよひ降るも早ちる雪 蒲衣
 年々梅谷柳原 枯亮
 暖過てもぬるも汗 花粟
 かく北の娘申しきしる影 渾史
 雪のなほも遊ひ日のしら 露泉
 雪の如く小杉はさるる 仙二
 糸長る衣竈にとくに待 東三
 鶴にまの術の工夫も々にま 百湖

ニオ

雲も富士越に峯作るも 月黛

三伏も引と日二日と末ちうく 狸子

戸帳の錦織も佛縁 雲岱

清所は艶さめぬと顔を覗いて 望文

市の崩走乃打ぬにあふ 吐屑

弓張の志不む木槿にけ疎く 一菊

出碧の沢をぬ 舟の傍手 江夏

懸乞枝をみても得せし口車 茶葩

ニウ

心も酔ふと造酒のかゆり 嗟早

持樂もかゝるは後代に行はれ 却蒲

燈町もても有麻糸 藜 蘿石

仰く香の曇れ海とハ今も程 招戎

魂を呼子に志と人々 希六

右 奇仙行

手向

是様で師の三めくりの塚まで 招成
永き日に盡ぬみよせのあまひが 有え

祭文

今年一月々々小祥忌の筈と披き
御免の御と祀る事神子告て曰
そまは〜〜〜師は高恩と惟まは
心かけぬまき〜〜〜室に入らけぬとぞふ

よ菰まふ赤の周見の白痴も形はさ
ア〜〜〜卯のふに曇る時啼れをまのれ
とのこ聞流〜〜木〜〜の志のま〜〜之際
初雪も妙なり〜〜の眺め持も松のまら
楓の木の〜〜も吟詠ひ〜〜して調
そね〜〜さ〜〜と〜〜のす〜〜世の周にた也倦
も慈と深く膝下に反替と清〜〜の年
久〜〜れを報謝せんと思つたお歡ハ百
とらほま〜〜ぬてほ〜〜あ〜〜り九牛の一毛も
む〜〜る〜〜たから歌きた孫のたのめと忘

るゝ八海乃信の事なりと増娘の芥を
甲て八四維の振立鶴鶴が翼をひろけてハ
ハ荒らけやまてあまきちりりとけくもはたと
より又誰れは信の事なりと甲も俳諧者
行のれあうら近き比き外道邪風の時
雲霧の如く起つて正法の月々に夏を
すゝま寔に悲みの絶るや酒那一嗚呼
希くハ神是とあつれとあつれとをきん
長く此國に殊多の末葉を後我
守らしめむと漢を言はし時に

さう前一寸志の薦蓋を供つて芳野
初来の季まきたふそら双瓶を捧げはナ
町名の良夜にたると一孤灯を照すハ
類に世世のあつて屢追慕の情なり

おのけや宵のさくらら
訪ふ月
茶烟

出席并に代香の人々のま向の事ハ
牌前に備つて梓行に及をもよめて
當季の即吟とあつた

名録

〜悪と語る人形〜青の雨 城前坊
りまや 露の 何の 虫乃 莖 几交

柳東連

菜の 茎や 馬に 乗り 梓 波子 宇朝

菜乃 茎や 一際 月より 岨 畠 芦笛

〜ら〜 霧に 曇る 澆 山 紫井

雪の ま〜 惜〜に 初冬 弘 佳暁

お上ハ 山 此の 山を 去 梓 只育

雪とけ ても 只の 世界と 成に たり 可咲

央陌連

浄車 姑 半〜 さむ けく 夕 橋 希六

口乃 思 姑〜 表 赤き 木の 葉が 蒼々

宵 明の 意より せし け 歸る 唐 湘雨

ふ〜 花の ち〜 ち〜 長 閑さ ぬかり 雲溪

制 札を 見ると 乙鳥の 戻り たり 一鳳

虫移の聲のそよ風のゆるり
其樂
藤波や人あしりよをゆりて
蜀阜

清陰連

やまゆやまのくくハ頂テ泊
但汝
箒とらもまてまてなまふ
車柯
大藪れ下道ゆるし短子の巻
丸黛
よふ卧のよあつ提持葉か
狸子
黄鳥乃あり遙う形まな舞中も
完里

梅咲や軒やる人れ黄し
山苛
きくまはやく中押きて持の聲
山兒
山と矢そ見しハさちる中ふ
乙伍

葉雲連

芥藻に眠ふ蝶あり流し川
南陵
浅川やうけうふのく草の才
楪二
くくく貴人の侍まや夕朧
里泉
きのふ待たれよ又惜む梅か
一溪

梅の香をたもとに跡。一糸。甚梅
半遠や陽當の中眠りたり。 城水

龍口連

刻月あつき夜七猫の心 枯亮
しの子に抱きそよごと梅の香 甚盛
よみまゝり人ありのけく日記か 吐屑
紐子啼て雲ハ高根をよふけりり 士郷
ふかきまを往々少路の梅の花 梅阜

羨羨もあ川りに朧月夜々 朶中

松向連

さよのくも雪をソ川に抱き自りけ 朶中
影桂や中れこぞに影りたり みる
とふ梅の薫りもあつ下糸 女 松尾

城西連

水ぬる玉岩や濁らぬ海の景 風素坊
香を個り妻戸を浅くや春のか 江夏

信向きよしんむけハカ原く系一後彦
くめ咲也隣一覗きと遊り云 古橋
ふれも又よさをあしや飛胡蝶 奥山
是にのこしうれてまきの別まじ 文定
花鳥のふもあしと朝寐るを 西河

琵琶島連

初花セカヤうくくき 二日三日 可移城
青きや新白に花う 鬱の紫 日星系

二日月風中とおろせ、時系、の系 巴人

五橋連

枯くりとかあき、枸杞よあ芽う系 其調
ゆく丁や系も却とありふと 兼行
巢こなき乃容よあやうら堂 白雀
柳の那くくくもさる 柳外 古依
彼山もまき花うん桜のまぬにりり 藤鉄
陽をく農渡活、門の簾のくく 吐勢

今朝は梅の影さした窓に
大笑
月くさの写隔の窓、那
里麦
暮る月も跡をさし田、き牛
東翠

南街連

揚子も白ふり幸や枕のさ
る洲
うけろふのる物にうしろをさ
里夫
まき柳の帆の流方(あはきりり
竹亭
あつみの梅盛るまきをさるるはぬ
蒲太

陽さや道におくまきしめ
風持
春成

白鳥連

春にたて文とけり
うしろのふと感に

そ中にあまのあまのやうの
花
一葉
原乃もまき川にたゆむ
曇りか
露清
京まで十歩にさした
貴しの色
里瓶
麻とあまの沙干や
花のたゆむ子
露泉
山く川よふの咲けと
春成
二重

あらしちハ家新感さしゆの小蝶 葉樂

うけろふや目さりにあつ切子履 花奥

蓬島連

明木の緑や柳のこきせし 澤夫

杉風に移る門田の雫り那 仙二

汐丁の影也湖水も空の色 百湖

志と侍里や曲突けくちせり 東三

明星のこがまて白し梅の志 昌川

梅白しそりハ月になく 孫 百曉

東方連

小原女の肩て歸りまやまの風 逸風

あゝ先のふも忘れし梅の那 乙川

宵の闇よりく梅れ白しハ 千兆

あつりつや小るふ眠る門柳 流古

雪あむりや峠にけく旅の笠 方壺

殿の家にあつけくもやまれり 枯卜

肩こ子にあふさうまき栴蓐
九門
鮎くもや罪も報も沙洲川
指月
蝶こや一羽にぬて夕らも
三化

文扇連

春の香 漸く老の世とぬぬ 官之
暮てや 藤とアサギ 柿、分 朝蔭
鶯の影 藤とさやぬ 菴、分 孤卜
入りさの影も伸り藤の志 月以

三月の影もはるかに梅葉く 月樵
よくこれハミ陰り 鶴山、分 龜汀
遠近や信くたに早る 峯、分 鶴步
捲人の道まはりきりまの 長也
長閑さや深山く 水乃言 峯早
おとふもまじや 胡蝶の志 菊葩
一六連
星れ影も 蒔ちし たり 苗代田 温古

峯をきく一巻の中はよの巻 舎芳

野乃こころぬれくて雲乃中 自春

限りあるこのまればこころ猫の恋 茶来

出代アヤや夢のくしくよかこころ 東湖

梅のまや塚は河ちくハ世のま 波野

成岩連

籠の目成よのこころ茶乃雪下 台川

も笑そぬののおよこころお梅が 羽白

さきハおぼたさるぬ春の雨 芦澤

りふも又遊戯くりまらみあめ 一の巻

道に碓さくりふとさるくつ山 忠実切

五位の巻流ぬと裁て月 朧 お山 四巻丸

きと近江人おすくやまの山 口 葛江

ふあハ来くハ菴のむき川 岩備 梅屋

お〜笑とさ〜山根の葉修細 大岩 氏岩

く門くく海くくくくくくくく

六橋板橋

張涼

凍くけ色くくくくくくくく

伊豆乗名

白己

くくくくくくくくくくくく

上

扱我

餘興 ミツ物

惜むりしん水く現の海き月く

兼子

くくくくくくくくくくくく

草際

空のぼく出くくくくくくく

凡素坊

玉居吟

此にくくくくくくくくくく

五行先師の遺中あきくくく

くくくくくくくくくくくく

屋むくくくくくくくくくく

きくくくくくくくくくくく

身體堅固の發叟なりしや
の先九十のまを遠へて其心也ふ
終に億古のまを程に去くや
時々菴のありし休安志の難延
節々に句とをりてるま

遠形を觀る

長く一期も多や 春三ふ

徐風彦

蕉門書林

皇都寺町通二條

橋屋治兵衛梓



愛知 県



1103267214

關
野
子
氏

十
三
六
少